

北海道ブルーリスト改訂版【哺乳類】（2019年）について

1 改訂検討の体制

哺乳類については、以下の構成員による「北海道外来種対策検討有識者会議哺乳類専門部会」を設置して詳細な検討作業を行いました。

○北海道外来種対策検討有識者会議哺乳類専門部会構成員一覧表

| 氏名 | 所属等 | 備考 |
|-------|--------------------------------|-----|
| 池田 透 | 北海道大学大学院文学研究科地域システム科学講座 教授 | 構成員 |
| 吉田 剛司 | 特定非営利活動法人 EnVision 環境保全事務所 研究員 | 構成員 |
| 押田 龍夫 | 帯広畜産大学環境農学研究部門環境生態学分野 教授 | 構成員 |

2 改訂検討の方法

前回リスト同様に次の4つの視点により対象生物の選定を行い、別表1「カテゴリー区分（対象生物の選定の考え方）」により、個別に評価を行い、「カテゴリー区分」のA、B、C、D、E、h及びKの種をリストに掲載しました。

＜4つの視点＞

- ①本道に導入されているか
- ②本道に定着できるか（越冬の可能性など）
- ③本道に定着しているか
- ④本道への影響等が報告されている、あるいは懸念されるか。

また、本道の生態系等への影響が最も懸念される「カテゴリーA」に区分された外来種については、対策の必要な種を明確化し、関係機関や団体が連携した対策が推進されるよう影響の程度等により対策の優先度を検討し、A1、A2、A3の3段階に細区分しました。

3 改訂結果の概要

哺乳類について、改訂版ブルーリストに掲載されたのは計27種で、改訂前から新たに4種を追加し、種名の変更に伴う統合で2種減少しました。

・カテゴリー区分の変更：5種

| 種名 | 変更理由 | 変更の内容 |
|-------------|--|-------|
| ハクビシン | 東北中部以北での目撃が少なく、道内でも奥尻島の過去の事例以外はないため、現在の道内での定着は考えにくい。 | A3→C |
| ニホンジネズミ | 道内での定着が確認された。 | h→B |
| イノシシまたはイノブタ | 2006年以降新たな捕獲や目撃はなく、現在道内での野生繁殖の可能性は低い。 | A3→C |
| プレーリードッグの一種 | かつて発見された場所での目撃はなく、現在の道内での定着は考えにくい。 | B→D |
| フクロギツネ | 特定外来生物であるため、輸入規制がかかるなど導入の可能性がきわめて低い。 | E→h |

・新規掲載種：4種

| 種名 | 掲載理由 |
|--|---|
| タヌキ（奥尻島に限る） | 文献情報などから昭和初期頃に奥尻島に初めて導入された可能性が高いため、国内外来種として扱う |
| ウマ | 放牧から野生化した個体が道内の一部で見られる。 |
| カニクイアライグマ | すでに生息しているアライグマに酷似し、すでに紛れて導入されている可能性もある。 |
| <i>Urocitellus</i> 属（リチャードソングリスなど）に含まれる種 | 道内で流通しており注意を有する。 |

・掲載内容を再検討した種：4種

| 種名（検討後） | 種名（検討前） | 変更理由 |
|------------------------------------|---------------------|--|
| シマリスの全ての亜種（北海道の在来個体群（エゾシマリス）を除く） | シマリス（チョウセンシマリス） | 近年、チュウゴクシマリスの輸入が増えており、チョウセンシマリスを含む道外から持ち込まれる亜種を全て対象とする。 |
| リス属に含まれる種（北海道の在来個体群（エゾリス）を除く） | キタリス、ハイイロリス | 海外では特定外来生物に指定されていない他種のリス属のリスが外来種化しており、道外から持ち込まれるリス属全て（ハイイロリスなど）で定着のおそれがある。 |
| アメリカモモンガ属に含まれる種 | アメリカモモンガ、オオアメリカモモンガ | オオアメリカモモンガと見分けにくいアメリカモモンガ属の他種が流通している可能性がある。 |
| <i>Petaurus</i> 属（フクロモモンガなど）に含まれる種 | フクロモモンガの一種 | フクロモモンガと見分けにくい <i>Petaurus</i> 属の複数の種が流通している可能性がある。 |

○国外外来種（19種）

| 目名 | 科名 | 種名（亜種名：*） | カテゴリー区分 | | |
|--------|---------|--|---------|------|------|
| | | | 今回 | 2010 | 2004 |
| ネズミ | ネズミ | ドブネズミ | A3 | A3 | A |
| | | クマネズミ | A3 | A3 | A |
| | | ハツカネズミ | A3 | A3 | A |
| | リス | リス属に含まれる種 | C | C | D |
| | | シマリスの全ての亜種（北海道の個体群を除く） | B | C | C |
| | | <i>Urocitellus</i> 属（リチャードソンジリスなど）に含まれる種 | E | h | - |
| | | プレーリードッグの一種 | D | B | B |
| | | アメリカモモンガ属に含まれる種 | E | E | E |
| | | タイリクモモンガ（亜種エゾモモンガを除く） | E | E | E |
| | | | | | |
| ウサギ | ウサギ | カイウサギ（アナウサギ） | A3 | A3 | A |
| ネコ | アライグマ | アライグマ | A1 | A1 | A |
| | | カニクイアライグマ | h | - | - |
| | イタチ | アメリカミンク | A1 | A1 | A |
| | | フェレット | E | E | E |
| | ジャコウネコ | ハクビシン | C | A3 | A |
| フクロネズミ | クスクス | フクロギツネ | h | E | E |
| | フクロモモンガ | フクロモモンガ属（ <i>Petaurus</i> ）に含まれる種 | E | E | E |
| ハリネズミ | ハリネズミ | ハリネズミ科の全種 | h | h | - |
| ウマ | ウマ | ウマ | B | - | - |

○国内外来種（8種）

| 目名 | 科名 | 種名 （亜種名：*） | カテゴリー区分 | | |
|------|--------|---------------|---------|------|------|
| | | | 今回 | 2010 | 2004 |
| モグラ | トガリネズミ | ニホンジネズミ | B | h | h |
| コウモリ | ヒナコウモリ | アブラコウモリ（※） | h | h | h |
| ネコ | イヌ | タヌキ（奥尻島に限る） | A3 | - | - |
| | | イヌ | A3 | A3 | A |
| | イタチ | テン | A2 | A2 | A |
| | | ニホンイタチ | A2 | A2 | A |
| | ネコ | ネコ | A3 | A3 | A |
| ウシ | イノシシ | イノシシまたはイノブタ | C | A3 | A |

※ アブラコウモリについて

本種は函館市では完全に定着しており、最近北海道へ入ってきたのか、あるいは元来北海道に分布していたのかを判断することは難しい。飛翔能力についてはコウモリ類の中では高い方ではないが、津軽海峡程度であれば十分に移動できると考えられる。

しかし、導入されたことも完全には否定できず、今後も貨物等に紛れて侵入する可能性があるため、リストからは外さず、hランクとした。

なお、北海道ブルーリスト2010では「イエコウモリ」の名称であったが、改訂版では通称の「アブラコウモリ」とする。

カテゴリー区分（対象生物の選定の考え方）

網がけしているカテゴリー区分に該当する種が、ブルーリストの選定種である。

なお、実験・動物園利用などの封じ込め下にある動物、農地・林地・園地や家庭菜園、花壇・宅地の庭などの人の管理下で栽培されている植物については、選定していない。

| 視点① | 視点② | 視点③ | 視点④ | |
|---|--|---|--|--------------------------|
| 本道に導入(※1)されているか | 本道に定着できるか (越冬の可能性など) | 本道に定着しているか | 本道への影響(※2)は | カテゴリー 区 分 |
| ○：導入されている △：不明またははっきりしない ×：導入されていない 可能性が高い | ○：定着できる (またはそのおそれがある) ×：定着できない 可能性が高い | ○：定着している △：不明またははっきりしない ×：定着していない 可能性が高い | ○：影響等が報告されている あるいは懸念されている △：上記以外 | |
| ○ | ○ | ○ | ○ | A |
| | | △ | △ | B |
| | | ○ | ○ | C |
| | | △ | △ | D |
| | | × | ○ | E |
| | △ | △ | F | |
| | × | × | × | G |
| △・× | ○ | ○(※3) | ○ | H うち 注意種 h (※4) |
| | | △ | △ | |
| | | ○ | ○ | |
| | | △ | △ | |
| | × | ○ | I | |
| × | × | × | × | J |
| (昆虫のみ) 導入されている 「室内昆虫」である(※5) | | | | K |

(※1)「導入」とは

野生生物本来の移動能力を超えて、人為によって意図的・非意図的に移動した(された)ことを指し、導入の時期については、原則として明治時代以降に本道に導入された生物種を外来種として捉える。

(※2)「影響」の例

- ①上位捕食者としての影響 ②植生などへの影響 ③競合、駆逐の可能性
④交雑による遺伝的攪乱 ⑤在来生物への病気、寄生虫の媒介
⑥農林水産業などへの影響 ⑦人の健康への影響

(※3)

この欄は、在来種である可能性があることにより、視点①を「△」とした場合に適用する。

(※4)「注意種」とは

導入される可能性が高く、導入されると定着し影響が懸念される等、特に注意が必要と考えられるもの

(※5)

貯穀害虫などは、A～Eなどに区分しにくいいため、「室内害虫」としカテゴリー区分を「K」とする。

カテゴリー区分 A の細区分

「A1」：緊急に防除対策が必要な外来種

「A2」：本道の生態系等へ大きな影響を及ぼしており、防除対策の必要性について検討する外来種

「A3」：本道に定着しており、生態系等への影響が報告または懸念されている外来種